

発信器調査に 批判の声

人と動物の共存問う試金石 北米手法の信奉から脱却を

ルポライター
滝川康治



知床半島で暮らすヒグマのうち24頭もに首輪式の電波発信器を装着して行なわれてきた調査に対し、「動物の尊厳を冒瀆する行為」と批判の声が上がっている。北米の手法を真似たこの調査の行き過ぎた実態を中心に、ヒグマと人間の共存を考える。

自衛策より駆除が先行して

知床半島の中央部に位置する知床五湖は斜里町の観光ポイントでもあり、夏は観光客でにぎわいを見せる。この一帯はヒグマの生息領域である。五月中旬、知床五湖周辺は季節外れの大雪に見舞われた。このため野性動物たちは餌を失い、エゾシカなどが死んだりした。ヒグマも餌不足を補った

めにこれらのエゾシカをあさり、土に埋めたりしながら、生きる糧を求めた。ヒグマと人間が遭遇する機会も増え、環境庁や道、斜里町は、第一五湖を回るコースを立ち入り禁止にした。「五湖は開放するのが原則。状況が改善してきたので、すべてを開放した」（知床自然センター管理事務所のは、

七月中旬のことだった。これに併せて、夜間閉鎖の措置を取った。斜里町では、観光客らによる三ヶ五湖の散策については、ガイドを付けて対応することを内部で検討中だという。

アイヌの人たちがキムンカムイ(山の神さま)と畏敬の念で接してきたヒグマ(撮影・門崎允昭さん。6月8日、知床半島のルシャ地区で)。オリで捕獲したヒグマに装着する首輪式の電波発信器(左上)



を忘れ、恐怖心が先行した結果、安易な駆除(射殺)が後を絶たない。斜里町内では今年、すでに五頭のヒグマが駆除された。そのうち、七月上旬にウトロ地区に現れた一歳半の子グマは、追い払っても森に戻らないために射殺された、という。知床自然センター管理事務所の研究員で町自然保護係長の山中正実さんは「あのクマは子離れしていた。地域を一時閉鎖できるならいいが、取る手段は射殺しかなかった」と、やむを得ない措置だったことを強調する。

が、住民の間には、「子グマまで殺さなくても…」という批判的な見方もある。山歩きの最中に何度かヒグマと遭遇した経験もある、地元の陶芸家・本

田剛嗣さんは、「当日、子グマを一頭連れて母グマを地元の人が目撃しており、殺されたクマは、親からはぐれて混乱していた可能性が高い。それを撃ち殺すなんて…。(町関係者が)クマを自然の一部として守ろうと考えるならば、

あつてはならないことだ」と、安易な射殺に憤りを隠さない。羅臼町内では八月下旬、番屋を荒らしたとの理由で、オリ裏に掛かったヒグマが射殺された。番屋の周囲に電気柵を張りめぐらす対策を始めた、と報じられた矢先の出来事。ここでも、早くから柵を設置していれば、射殺という最悪の手段を講じなくてすんだのではないだろうか。ヒグマの受難が

責任者の山中さんは、調査目的として次の三つを挙げる。
①ヒグマの行動パターンを把握する
②生息環境を明らかにする
③人間との遭遇を避ける応用的な研究(駆除などの対策に役立てる)

首輪装着で監視されるクマ

六月下旬のある日、五湖方面からウトロに向かって道道知床公園線を車で走っていたわたしは、生まれて初めて

たクマだ。ヒグマに首輪という奇妙な取り合わせは、何とも不自然に映る。人間と野生動物のゆがんだ関係を印象づける光景だった。

間近に野生のヒグマと遭遇した。道路脇の斜面をゆっくりと歩く、威風堂々の姿に感激したが、そのヒグマには首輪が付けられていた。斜里町による電波発信器調査の対象にさせられ

知床自然センターによると、この発信器調査は八八年から始まり、すでに二十四頭(うち三分の二が雌の成獣)に装着した。途中で発信器が脱落した

「全道的にヒグマの分布が減り、モザイク化されてきている。どういう生息環境を残すのか、データを出す必要があるが、これまでは一年を通じた生息環境が分かっていたいなかった。発信器調査で得られたデータは、森林管理や開発行為の際にも活用できる。行動パターンが分かれば、公園利用を季節的に避けたり、ヒグマを追い払う方法が見



鳥獣管理センターに掲示されている発信器装着時の写真

えてくる。最終手段としてヒグマを駆除する場合にも、調査が役立つかもしれない(山中さん)
つまり、ヒグマの保護と同時に、国立公園の利用を容易にするために活用する、というわけだ。
発信器調査は、北米などで行なわれてきたものを日本に導入したもので、

次のような手順で進められる。
ヒグマの通りそうな場所に、ドラム缶を横にしたような奥行き二〜三mの捕獲用のオリを設置して、奥に置いたハチミツをおびき寄せ、中に入ったクマがハチミツを食べると格子が落ちる仕組みになっている。捕獲されたクマは、麻酔して歯を一本抜き年齢を測

定、血液採取や体重測定なども行なう。そして、首輪式の電波発信器と耳標を付けて放される。
捕獲場所が放すのが基本だが、問題を起こすヒグマについては昨年初めて「奥山放獣」と呼ぶ、全く別の場所へ放す方法を試みた、という。問題行動のあるクマには、ロケット花火のようなものやゴム弾で威嚇したり、カプサイシン(トウガラシの辛み成分)入りの撃退スプレーなどでコントロールするケースもある。
発信器の電池の寿命は四年で、切れ前に再捕獲して交換し、ずっと発信器を装着しておくのが基本、とされる。

「成獣には発信器をずっと付けてもらっている(山中さん)。
大地を闊歩するヒグマにとって、人間に騙されて痛い目に遭ったうえに、電波発信器で行動を監視されるのだから、ずいぶん迷惑な話である。が、調査責任者の山中さんは、こう言っていて、意に介さない。
「莫大なデータによって、知床全体、北海道全体のための資料を集める。(発信器の装着で)ヒグマが恐怖心を抱くことは多少ともあるだろうが、一時的なストレスは仕方がない。何日かたつと、クマは普通の生活に戻っているし、子どもも産んでいますよ」

研究者から上がる憂慮の声

「発信器調査は、世界的にも一般的な手法。目視で調査できることは限られている。発信器を付けないでヒグマの行動圏をどうやって把握するのか(道

自然保護課野生生物係)というのが、この調査方法を採用する側に共通する見解である。
山中さんは、「この調査によって、雌の成獣は十四平方キロメートルくらいの範囲を定着的に使うことが判明した。若い個体は、雌の成獣よりも広い範囲を動いていることも分かってきた。季節的な行動圏が見えてきたし、冬眠する環境や繁殖の様子も分かっていた」



「知床は動物虐待の現場」と斜里町の調査を批判する門崎さん

と、その成果を強調する。
が、動物に負担を強いる手法には住民の間に根強い反発があり、研究者の間からも批判の声が上がっている。
ヒグマ研究の第一人者の門崎允昭さん(道開拓記念館主任学委員・農学博士)は、十年前の知床原生林伐採反対運動の原動力が、

南の上の国町で発信器を装着してヒグマの行動圏調査を行なった。道内三プロックで八年間を費やして、ヒグマの分布状況を把握する調査の一環として実施したのだが、その後、道は発信器調査をやっていない。電池の寿命などもあり二シーズンが限界だった。他の地域では予算や人員などの態勢が整わなかった(道自然保護課野生生物係)

①人手の入らない自然を子々孫々に残そう(自然倫理)
②森の獣たちもそっとしておいてやろう(生物倫理)
③人為的な圧力を加えないでおく
の三つにあったことを重視する視点から、発信器調査に象徴される知床の現状を憂慮する。そして、

必要最小限にとどめて短期間で行ない、終わったらすぐに外すべきだ——というのが、門崎さんの基本的な姿勢だ。「斜里町などは日本で真に必要なものか否かのきびしい吟味もなしに、この調査が最先端で生息のすべてが解明できる、と信じているらしい。しかし、彼らが新発見として発表している内容は、すでに分かっていることや、予想されていたことを発信器調査で再確認したにすぎない事象ばかりだ。研究者は一步踏みとどまって、果して必要な調査かどうか反問すべきだ」と、テクノロジーに頼った安易なヒグマ調査に警鐘

生活痕で分かる動物の生態

発信器調査を全面的に否定しないが、必要最小限にとどめて短期間で行ない、終わったらすぐに外すべきだ——とい

のが、門崎さんによると、道側の地元住民に対する説明に反して、発信器を付けたヒグマが現れるはずのない場所に出没したり、発表内容に対する不信の声が広がったために、調査の継続が困難になったのだという。外国から輸入した調査手法は、住民にすんなり受け入れられなかったようだ。

を鳴らす。
長年にわたる研究生活のなかで、門崎さんが重視してきたのは、動物の痕跡から生態を把握していく手法だ。「自然状態で生活している動物と偶然遭遇し、その生活状態を逐一記録し、集まった大量のデータを解析して編んでいくことで、その動物の生態は分かる。ヒグマの姿が見えなくても、すべての生活痕が語りかけてくれる。対象動物の心を読みつつ探っていくと、いろんなことが見えてくるんです」と強調する。器械類を駆使した冷たい調査とは対照的な、温かみのある言葉だと思ふ。

「知床は、日本で最も野生動物を虐待している現場だ。共生の手法の確立を大義名分に、発信器の装着でクマやシカ、キツネに対して、生態を無視した負担を強い続けている。この手法はアメリカやカナダの猿まねで、独創的なことといえは放逐前にクマにリンチを加えていることぐらいだ」

と、斜里町などの対応をきびしく批判する。
道は九二年から九三年にかけて、道

の調査が最先端で生息のすべてが解明できる、と信じているらしい。しかし、彼らが新発見として発表している内容は、すでに分かっていることや、予想されていたことを発信器調査で再確認したにすぎない事象ばかりだ。研究者は一步踏みとどまって、果して必要な調査かどうか反問すべきだ」と、テクノロジーに頼った安易なヒグマ調査に警鐘

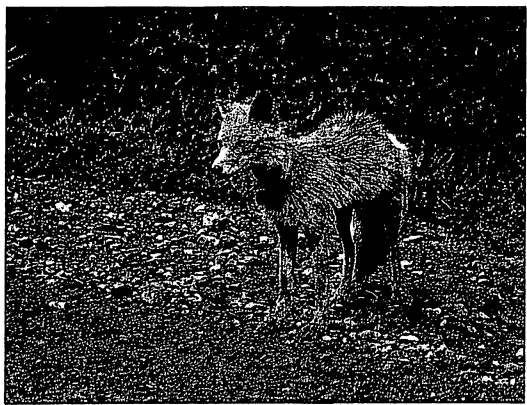
安心して山菜採りができる」と朝日新聞に書いていたが、この考え方の何と



5月16日、知床五湖のそばに現れた発信器を付けたヒグマ。首に食い込んでいる(小田島隆さん撮影のビデオからプリント)

と、テクノロジーに頼った安易なヒグマ調査に警鐘

安心して山菜採りができる」と朝日新聞に書いていたが、この考え方の何と



キツネにも発信器。「ジャンプして餌を捕るときは妨げになる」との指摘も

が仲良くしてもらわないと、困るのは動物やわたしたち道民である。
 知床自然保護協会長の石井政之さんは、「限られたクマに首輪を付けて、森から出てきたら今度は有害鳥獣ではない。サーチライトで照らして行なう、自然センター主催の夜の動物観察会にしても、生態系を攪乱している。夜くらい動物の自由にさせてやりたい。野生動物と人間は棲み分けを考えろべきだ」と現状を嘆く。そして、幅広い人々による「ヒグマプロジェクト」

の実施を提唱する。
 「環境庁や道、町、猟友会、自然保護団体、門崎、山中氏らが入って、一緒に議論していかないと混乱するだけ。そこで、知床のクマと人間の共存についての方法を見つけ出すべきだ。研究者のエゴを出し合うのでは解決にならない」(石井さん)
 わたしも石井さんの提案に賛成である。発信器調査を推進してきた行政や若手研究者には、ヒグマに対する畏敬の念を抱いていたアイヌ民族の自然観に学びつつ、先輩格の研究者や住民の声にきちんと耳を傾けて、謙虚な姿勢で臨んでほしいものだ。
 森の王者・ヒグマが生活できる環境が保たれることは、人間を含めた他の動物もまた安心して暮らせることを意味する。知床こそ、そうした自然環境を残しておいてほしい地域だし、発信器調査に象徴される、ヒグマの領域への行き過ぎた侵入行為は改めるべきだ。

おぞましいことか。クマのいる場所には、正々堂々と自然に立ち向かう者がけが入るのですよ」
 ヒグマに対する餌づけや、暴行に

北米型「管理」に反省の兆し

「八〇年代前半、北大ヒグマ研究グループが初めて、北大天塩演習林で発信器調査を試みたが、麻酔の失敗でクマが死んでしまった。その後も、餌に掛かったクマが衰弱してしまい、ハンターに殺してもらったことがある。(本道のヒグマ研究の主流を担う) 北大出身の連中には、研究者としての基本的な資質が欠けるのではないか」



知床五湖入り口のポスター。「五湖すべてをガイド付きで周遊を」の声もある

こう指摘するのは、網走市に住む在野の研究者・小田島護さんだ。七〇年代初めから大雪山をフィールドにヒグマの調査を続けてきた小田島さんは、七月から八月にかけてアメリカを訪れて、「環境と文学」をテーマにした学会に出席したり、国立公園でのヒグマ研究の実態に触れてきた。
 「斜里町や道の言う『資源管理』の考え方は、アメリカの国立公園に倣ったもので、発信器調査もその一環だ。行ってみると、いい方向には進んでおらず、悪い形で野生を管理していた。しかし、人々に思想的な影響を与えている人たちは、今後も発信器調査を続けることを善しとしていなかった」
 「グレイシャー国立公園周辺でボランティア活動をしている、修士論文でクマの生態を取り上げた研究者がわたしに、「アメリカの保護管理に疑問を持っている。なぜ日本ではアイヌの自然観

ついて、斜里町側は否定するが、この発信器調査をめぐる論争は、人と野生動物の付き合い方を問い直す試金石であることだけは間違いない。

を生かさないのか」と話していた。カナダでは、一万二千頭のシロクマのうち五千頭にイヤータグ(首標)を付けてきたが、それをやった人が、「これほどのことはしたくない。速くからクマを眺めているのが好きだったのに」と漏らしていた」
 行政サイドの若手研究者が手本にする北米の地にも、反省の兆しが表れて

情報公開を進め討議の場を

山中さんから若手研究者と門崎さんらとの論争の背景には、自然観や調査に対するスタンスの違いに加えて、行政側の縄張り意識が見え隠れする。
 「基礎調査や管理の手法などの作業を我々の見えないところでやったり、道の委員会のメンバーの大部分を北大出身者が占め、門崎氏を外している。公園利用を拡大するための調査をやるうとするところが、彼らの限界だ」
 と、小田島さんが解説する。
 門崎さんは七八年から二年に一度、道内全市町村を対象にヒグマの捕獲と被害の調査を続けてきたが、斜里町は今年、「斤内会議の結果、回答できない」と資料提供を拒んだ。「支庁を通じて道

いるというのである。
 小田島さんの元には最近、実験動物の廃止を求める団体から、「知床の発信器調査の実情を知りたい」という問い合わせがある。今後は環境庁や道に対して、こうした調査をやめるように要望したり、質問状を出していくことを計画している。

に報告しており、個別に対応する必要はないと判断した」(町耕地林務課の表向き理由だが、本音は別のところにあるようだ。六月に斜里町観光協会が主催した講演会の席上、門崎さんは「発信器調査は動物虐待」と批判したが、そのことが尾を引いている。資料を提供しない自治体は斜里町のみであり、大人げない話だ。
 「担当者に聞くと、わたしを招いた人たちが町の自然保護行政に反対しており、資料がそっちに回ると困る、と言う。驚いたね。斜里町は道内で最も住民自治の逆を行っている」
 と、門崎さんが憤慨する。「野生動物と人間の共存」を唱える前に人間同士